

今度室田翁（室田義文）の篤志により、諸生派供養の為に、祇園寺に朝比奈知泉撰文の記念碑を立てることになり、徳川公（公爵徳川国順公）に篆額を請うたところ、天狗党の子孫の中に、これを以ての外の事として、公爵家に抗議を出したものがあり、公爵家でも、そんな苦情のあるものではといたので、躊躇されており、室田翁も、強いてということをや遠慮して、篆額なしの碑を立てることになるらしいということ聞いた。

私は（本文の著者）これを聞いて、水戸は又七十年、八十年後戻りをしたような気がしてならぬ。今時こんな考えを持っている人があるというのは、一種の奇蹟とでもいうべきで、驚嘆すら感じるが、しかし又退いて考えてみると、「こんな考え」こそ水戸特有の根性で、これあればこそ彼の兄弟血で血を洗う醜争を以て、水戸勤王の歴史を潰すに至ったものかとも思う。記念碑に篆額のないのは惜しむべきであるが、それよりも惜しむべきは、この水戸根性の今尚潜在していることだ。（三光生）

（昭和十年二月二十一日いばらき新聞掲載）

また別に、天狗諸生の争いは、七十年の昔に解消しても、まだその当時の思想感情を持つ者が一部水戸人にあると云う。先ごろ蘇峰学人の碑文を彫った巨大な勤王碑が建った処、諸生党の犠牲者の為にも、同様のものを建てて、弔意を志そうと云う計画があるのを聞いて、勤王碑より大きいものを建ててはならぬと、石屋へねじ込んだ人々があると云う。三つ子の魂百までもとはいおうか、区々たる水戸の政権争奪に没頭して、天下の大勢に置き去れられた水戸人の子孫だけのことはある。（昭和十年三月）

後日室田翁（室田義文）から聞いた話ではあるが、この記念碑の大小問題は波紋を起こし、遂に二つの大きさを測ってみて、その大小を決定することとなった。即ち二、三の関係者が測って見た処、その大きさは同じであったという。勿論一つの仙台石を二枚に割って使ったのであるから、大小はありませんと、石屋さんの云う通りであったので、この問題は、大山鳴動鼠一匹も出なかつたと云う結末であった。後日水戸で友人から聞いた話であるが、勿論碑石は同寸法であったが、祇園寺に建てられた諸生党の碑石は、天狗党のそれに比し、土壇が高く造られてあったので、一寸見た感じでは、高く大きく見えるのである。それでこの問題が勃発したのだといわれた。

嘗て東京新橋駅前の蔵前工業会館に開催せられた水戸史談会の席上で、室田翁が話されたことがある。即ち翁が諸生党記念碑建設の精神は、七十年（当時

の計算)に亘り、水戸人の一部からは、奸党と呼ばれ、勅許の賊と迄罵られ、今日でも容れられざる先輩の為に、絶えて為さざりし仏事を営み、同時に合同記念碑建立を計画したのである。今にして掲記の事実あるに見ても、予(室田翁)がこれを決行せずんば、何れの日か此の挙を敢えて成すものはあるまいといわれた。故に万難を排し、凡有る攻撃を甘受して着手したのである。然るに何ぞや、水戸市居住の天狗党子孫の者より君(室田翁)は本気で諸生党の記念碑を心算かと云われ、決闘迄申し込まれたという。従って、その除幕式等も極内密に簡素に営むといわれた。其の後の翁の話では、除幕式当日には、悲壯の決意を以てこれに臨み、且つ懐中には、拳銃を忍ばせていたといわれた。洵に徹底した抗争ではないかと思う。

室田翁も掲記の事情から、徳川公爵に断られたので、致し方なしに、篆額なしで建てる考えであったろうが、悲憤の余り、それならばと、自分で篆額の四字を書き、撰文は当時本邦での文豪といわれた朝比奈知泉である。知泉も水戸人であり、諸生党の首領であった朝比奈弥太郎の一子であり、碑文を書くにしても、大いに注意もし、再考も必要であった。仮に立派な文章を書いても、またぞろ碑石の大小問題の如きが起こっては一大事であると考えてか。

碑銘としては誠に短い五十三字の簡素な銘文である。故にこれには、文句のつけようのなかったであろう。碑石の大小では、相当問題となったのであるが、碑銘については、それはこれを聞かなかったのである。室田翁も以て瞑すべきであろうと思う。

そく聞く処によると、旅客輸送として経営されているバス運行に際し、天狗党関係者の経営するバスには諸生党子孫の人々は乗車しないし、諸生党のそれには、天狗党関係者の方々は乗らなかつたということを知ることがある。こんな事があった時代も掲記されたことから見ると過去にはあつたかも知れない。

室田翁が書かれた篆額四字であるが、幕末翁の青年時代には、水戸の弘道館に於いて、厳格な制度の下に勉学なされたのである。その故にその文字も書風も共に立派なもので群を抜いているのではないか。当時東京に毎月一回開催せられた水戸史談会には、著者は欠かさず出席したのであるが、翁もまた老後の生活であり、よく出席なされ、弘道館での勉学時代のことや、食事のことなどもなどお話をされたのを聞いていた。今にして尚なつかしさを感ずるものが多々ある。本項を終るに当り、朝比奈知泉の撰文を下記に収める。

室田翁が昭和九年三月二十七日、東京新橋前の蔵前工業会館で、「弘道館の回顧」の題下で、翁が青年時代勉強した弘道館の、学風・生活・食事等々全般に亘り、長時間講演されたことがある。著者などは、弘道館といえは、水戸徳川藩の経営する学問所で、凡てが立派な学校であったのである。而してその回覧談によつて、その内容を始めて知ることが出来たのである。而してその厳格さは実に言語に絶するものがあるが、合宿している学生の食事などは、著者等の予想に反した頗る簡素なものであったことを始めて知ったのであった。

恩光無辺

明治戊辰悲徳川宗家之衰廢慄  
慨赴難者水戸藩士中不下數百  
人而

皇恩洪大録宗家後焉遺靈亦可以

瞑矣茲举其姓名録千碑背云

昭和九年甲戌秋

朝比奈知泉撰

室田義文篆額